先輩の作文と体験記

1〔教師になってやってみたいこと〕

「教師になってやってみたいこと」

（家政学部被服学科　平成22年３月卒業）

私が教師になってから早くも４ヶ月が経とうとしています。中学３年生の頃から教師という職業に憧れていましたが、実際に教師になると今までの想像を超えた、日々感動の連続です。

授業のエプロン作りでは、慣れない手つきでも一生懸命ミシンを使い、真剣に刺繍のデザインを考えている姿を見ると嬉しくなります。座学とは違う実習の良さは、近くで生徒と接しコミュニケーションがとれる事です。そのため、早く信頼関係が生まれお互いに親しみやすくなります。私は出来るだけ生徒との距離感を大切に、授業を行うようにしています。その中で、「先生」と言って来たり、「家庭科って面白い」という生徒の何気ない行動や言葉が教員にとって一番の力となり、やりがいを感じる瞬間でもあります。

家庭科とは、とても生活に密接している教科のため、生徒のこれからの生活に少しでもプラスになるような授業をするよう心掛けています。

様々な面を見ていて感じることですが、生徒一人一人個性があり良いものを持っているのでこれからの成長がとても楽しみです。

今、授業の他に部活動の顧問や大学入試の小論文講座も担当しています。これからも、授業だけで満足せず積極的に様々なことに取り組み、生徒に信頼されるよう自分自身を高めて行きたいと思っています。

教員が生徒に与える影響はとても大きく重要なため、少しでも生徒の今後の人生の糧となりプラスになるような後押しが出来たらと思っています。そのためにも、いつでも生徒の立場に立ってものごとを考え、厳しさの中にも温かみのある指導をしていきたいと思います。

そして、今後「この先生に出会えて良かった」と生徒の心に残るような教員になることがこれからの私の目標です。

「学び続けていく教師」

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成22年３月卒業）

「小学校の先生になりたい！」

小学校の卒業文集に書いてから早10年、私は今、小学校の教壇に立っています。

４月から７月までの約４カ月間、クラスでは毎日色々なことが起き、１つ１つ丁寧に解決し、きめ細かい指導を胸に日々駆け抜けてきたつもりですが、振り返ってみると反省ばかりで、本当に子どもに申し訳ないと感じています。

それでも、『うちの子、先生のこと大好きって言っていますよ』と、やんちゃで普段から私に叱られてばかりの子どもの保護者から言われたり、私が午後から出張で学校を出るときに『先生行ってらっしゃい！』と正門まで子どもたちが見送ってくれたり、『先生大好き！』と抱きついてくれるあの子たちを見たりすると、嬉しくて嬉しくて涙が出てきます。

クラスで嬉しいことがあったときは一緒に笑い、喜びました。クラスで悲しいことがあったときは、一緒に泣きました。

どの子も自分の気持ちを素直に表現できていることが、本当に嬉しくて心地いいクラスだなと思います。

教師は子どもに悩まされ、子どもに救われる毎日なのだと日々感じています。

「先生」は子どもにとって、学校を卒業したあとも、何年、何十年たっても、ずっと「先生」です。子どもは「先生」から言われたさりげない一言を、いつまでも覚えているものです。それほど教師は子どもにとって大きな存在であり、影響を与える存在であります。だからこそ教師は「聖職者」とも呼ばれるのです。

私は学生時代、教師になる「までの」努力をしてきました。そうして教師になった今、私は教師になって「からの」努力として、日々精進していかなければならないと感じています。子どもの一生に影響を与える存在、「聖職者」とも呼ばれる教師は、学び続けていく人であってこそ、人にものを教える権利を持っているのだと思います。

これからも、顔施・打座即刻の心で職務に励み、決して驕ることなく、常に子どもとともに学び続けていく教師でありたいです。

教師になって４ヶ月、やってみたいこと

（文学部英文学科　平成22年３月卒業）

教師になって４ヶ月が経ち、生徒の様子や学校の動きにも少しずつ慣れ、毎日忙しいながらも充実した毎日を過ごしています。

さて、「教師になってやってみたいこと」ですが、私は教師になる前から「楽しみながらできる授業」を理想として、それを実現したいと思っていました。しかし、現場に立ってみると簡単なことではなく、自然に楽しく身につけてもらいたいという意図で行うアクテビティーも面倒に思う生徒や、授業中に何度起こしても眠っている生徒、ノートもとらずただ机に座っている生徒など、私が目指している「楽しく生徒が意欲的に取り組む授業」という以前の問題で、生徒の授業への姿勢に悩まされていますが、一方で現状を実感できたと納得したという点もありました。

そこでこれから、この現状を踏まえて自分にはなにができるのか、どうすれば生徒が「もっと知りたい」と感じ、自発的に学ぶようになるのかということが、これからの私の「教師になってやってみたいこと」に繋がるのですが、それは、授業中はほどよい緊張感で、私が教室に入ってきたらすぐ授業をする態勢になったり、集中して授業を聞いたりとごく当たり前のことを生徒に身に付けてもらうことです。授業中、一言も話させないという厳しく息苦しい授業にするのでは意味がないと思います。そうではなく、生徒の「自発性」を引き出したいと思います。今の時点で私ができることはテンポよく授業をし、生徒の理解度を把握し、それに合わせた授業を展開することです。

とてもちっぽけなことだと思われてしまいますが、教師になる以前と教師になってからの「やってみたいこと」は大きく変わったと思います。全員が授業に集中しないのは仕方ないことだからと手を抜くことはいくらでもできると思います。しかし、授業を受けている生徒の50分間を無駄にしてはいけないという思いをいつまでも持っていきたいと思います。何年もキャリアを重ねれば、また「やってみたいこと」は変わってくると思いますが、これが教師になって４ヶ月の私のやってみたいことでもあり、目標でもあります。

『教師となって第一歩』

（家政学部食物学科食物学専攻　平成29年３月卒業）

私は４月から、晴れて憧れの教師になります。教壇に立ったら、生徒が「家庭科って面白い。」「家庭科は必要！」と思える授業を日々していこうと思っています。

家庭科は衣食住の知識や技術だけでなく人の一生・自身の生き方などについて学び、生きていく中で必要不可欠な教科です。家庭科の楽しさを伝えるために、教科書を見るだけの平面的なものではなく、実物を見せたり生活の身近な話を取り入れたり、教師の一方的な授業ではなく生徒が主体となって考えたり話し合う授業を工夫していこうと思います。また、家庭科は被服や調理の実習があるため生徒との距離を縮めて個別の指導をし、生徒に「できた！」という喜びを経験させたいです。

高校生という時期は自分のこれからの人生を意識しながら成長していくので、授業を通して生徒が自分の生き方や人生を見つめることができるようにしていきたいと思います。

また、生徒とのコミュニケーションを大切にしていきたいと考えています。教育実習などを通し、教師の忙しさを

知りました。忙しくてあまり生徒と関われないという場面もあるかもしれませんが、忙しい中でも生徒と過ごす時間を大切にし、ひとりひとりの生徒を理解していこうと思います。教育実習やボランティア経験などを通して、実際の生徒と「先生」として関わり、生徒にとって教師の影響力はとても大きく重要なのだと実感しました。教師のはたらきかけが生徒の変化や成長に大きく関わっていくことを常に頭に置き、「生徒にとって何が一番良いか」を考えて、行動していきます。

４月から正式に教師として教壇に立ちます。期待と不安で溢れています。生徒のことを第一に考え、生徒ひとりひとりの気持ちを理解し、生徒の心に寄り添っていける教師を目指します。そして、私自身も生徒と一緒に学び続けていく教師になることを目指し、精一杯頑張っていきます。

「教師になってやってみたいこと」

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成29年３月卒業）

私は子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になれる教師になりたいです。

なぜなら、私は小学校３年生まで友人関係が上手く築くことができず、何事にも消極的でした。そんな私に担任の先生が「あなたはみんなを引っ張っていける力を持っているのだから、もっと自分に自信を持ちなさい」と言って下さいました。自分自身が気づいていなかった新たな私の長所を見つけて下さった先生との出会い。私はこの先生との出会いのおかげで人生が大きく変わりました。この恩師との出会いにより、「私は将来教師になり、今度は私が子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になりたい」と思ったからです。

大学生活を通して、子どもの可能性を引き出すためには、どうしたら引き出せるのか常に考えながら学んできました。大学の授業やボランティアでは、多くの小学校に行き、たくさんの先生方や子どもたちと触れ合うことができました。そんな中で、素晴らしい先生の授業をみる機会を得ました。その先生の授業は、初めて見た時から子ども一人ひとりをきちんと理解されているのがとても伝わってくる授業でした。授業を受けている子どもは、どの子も一心に考え、のびのびと発言し積極的に学んでおり、45分の授業はとても短く感じるものでした。45分集中して学ぶことができるのは、教師がこの授業で一人ひとりに何を身につけさせたいかが明確に考えられているからだと思いました。そのため、授業が終わった後「どうしてあの場面でＡくんを指したのですか？」と質問しても、その子の背景まで理解された返答が返ってきました。子どもに確かな学力をつけるためにも、誰に何を聞かれても理由が述べられる授業作りをすることで、子ども一人ひとりに合った授業をすることができるのだと改めて確信しました。子どもの新たな可能性を引き出してあげるためにも、教師は日頃からあらゆる場面で子どもとコミュニケーションをとり、児童の背景までも理解していくことがとても大切だと思います。

今の世の中の子どもたちは、未来が不透明であり、夢を持つことや目標を持ち突き進んでいく意欲が持ちづらい世の中になってきています。だからこそ私は、子ども一人ひとりと正面から向き合い、児童一人ひとりを理解し、６年間の中で多くの経験をさせ、その中で自分では気づいていない新たな可能性を引き出してあげたいです。教師は、１日の中で長い時間子どもと関わることができます。だからこそ、一人ひとりを知ることができ、新たな可能性を見つけ引き出してあげられるのだと思います。その子にとって出会った先生は、一生先生です。一人でも多くの子どもの可能性を引き出し、未来を生きる力になれる。そんな教師を目指したいです。

2〔教育実習〕

「教育実習を経験して」

（千葉県　市立中学校）

私は母校の中学校で、５月に家庭科の教育実習と９月に栄養教諭の教育実習をさせていただきました。

家庭科の教育実習では、家庭科の指導案を何度も書き直し、授業の教材作成や調理実習の材料購入、道徳の授業計画、生徒との交換ノートのようなもの、部活動指導、清掃指導、放課後のパトロール、実習録の記入など、やるべきことがたくさんあり大変でした。しかし、「生徒にこんなことを学んでほしい」や「生徒の学校生活をより豊かにするためには何ができるだろう」ということを考えると何事にも懸命に取り組むことができました。

私は、実習で難しいと思うことがありました。その１つが話し方です。「もっと声の大きさやスピードにメリハリをつけなければ最も伝えたいことが分からなくなってしまう。」と指導していただき、注意して話したつもりではありましたが、簡単には改善することができませんでした。２つめに時間の使い方です。特に調理実習は時間が予定通りに進まないことが多く、臨機応変に対応する難しさを痛感しました。さらに、空き時間が全くない日、生徒との交換ノートのようなものの記入は休み時間で終わらせるべきだったのですが、終わらせることができず、生徒総会の時間を使わせていただいてしまいました。

このような私に対しても、先生方はとても温かく指導をしてくださいました。学級経営の指導をしてくださった先生は、放課後の時間を使って、実習初日から生徒一人一人について教えて下さり、他の日には教室の提示についてや今まで出会った先生方のお話など、とても多くのお話をしてくださいました。教科指導の先生は、午後から出張であっても夜７時ころに学校へ戻り指導をしてくださいました。また授業の参考にと、様々な資料を用意して下さいました。

先生方や生徒のおかげで、とても充実した実習になりました。いつか教員となり、実習で得たものを生かしていきたいと思います。

（家政学部食物学科食物学専攻　平成24年度教育実習）

（東京都　区立中学校）

中学校での３週間の教育実習は毎日新たなことを吸収できた。

教科指導では、始めの頃は指導案通りに授業が進まず、落ち込むこともあった。しかし、落ち込むだけではなく、どうしたら生徒に伝わる授業になるかを授業の後に必ず考え、指導教諭から頂いたアドバイスを基に教材研究に取り組んだ。悩んだりした中でも、授業中に生徒が「わかった」という表情をしているのを見たり、手作りの教材を使って生徒たちがグループワークをしている姿を見たときはとても嬉しかった。また、「先生が教えてくれたことを作文で使ってみたよ」と言ってくれた生徒がいた。授業で教えたことが生徒に伝わっていると実感した瞬間だった。

学級指導では、まず生徒のことを知ろうと心掛けた。給食の時間に生徒の好きなことや部活のことを積極的に聞いた。また、実習中は運動会の練習期間でもあったので、大ムカデの練習をしている生徒の伴走をしたり、大縄跳びでは跳んだ数を数えたりした。部活動に参加することで生徒との距離を縮めていこうと思った。運動会の練習や部活動に参加することにより、授業だけでは分からない生徒の一面を知ることができた。

そして、運動会の練習をしていく中で、生徒たちが団結し、一人ひとりが成長していく姿が見えた。私が担当したクラスは運動が不得意な生徒が多く、運動会の練習を始める前に生徒たちは「どうせ勝てないし…」と言っていた。しかし、クラス全員で跳ぶ大縄跳びでは全員が声をかけあって練習をしていて、本番では学校内で１位になることができた。練習を頑張っている生徒に「頑張っているね」と声をかけると誇らしげな顔をしていた。かつての自分がされたように、生徒をしっかり見て、声をかけることが教師にとって必要なことだと思った。

教育実習の３週間を通して、教員になりたいという思いがより一層強まった。そして、この経験を今後に生かしていきたい。

（文学部日本文学科　平成24年度教育実習）

（都立高等学校・英語）

私は、母校の都立高校で３週間教育実習させていただきました。この３週間は想像していたよりも、短く、あっという間でした。

第一週目は、主に授業見学をし、本格的に授業をしたのは第二週目からでした。授業は２年生の「英語Ⅱ」を担当しました。習熟度別に別けられた異なるレベルのクラスを３つ受け持ちました。実際に授業をしてみて感じたことは、生徒は何を知っていて、何を知らないのかが分からないということです。簡単な単語の意味は知っているだろうと思い、説明を省いて授業を進めていると、生徒が混乱して教室がざわつく時もありました。今考えると、教育実習中の私は授業を進めることに必死で、生徒の表情や様子を見ながら授業が出来ていませんでした。生徒の「分からない」という気持ちに気付いてあげられるような、余裕が持てていたら良かったなと反省しています。

生徒たちとは、授業以外にも関わる場面が多くありました。担当した二年生のホームルーム学級の生徒には、自分から積極的に話しかけて、生徒たちの事を知ろうとしました。実習期間中に体育祭が開催されたこともあり、一緒に暑い中、汗をかきながら練習に参加することで距離が縮まったように思います。また、ホームステイ参加者への準備指導にも携わり、自分がホームステイや留学へ行った経験を活かして相談に乗りました。こうして授業時間外に関わった生徒は、私の授業に積極的に参加してくれる頼もしい存在になったので、自分から生徒と関わることの大切さを改めて実感しました。

教育実習最終日に、担当ホームルーム学級の生徒たちが色紙をくれました。「授業楽しかった」や「絶対に先生になって」などのメッセージを見て、やはり私は教師になりたいと思いました。たくさんの先生方や生徒たちの助けや協力のもと、無事に教育実習を終えることが出来ました。この経験を将来に活かせるよう、励んでいきたいと思います。

（文学部英文学科　平成24年度教育実習）

「一生の思い出」

（東京都　市立中学校・理科）

私は、理科教職の第一期生ということもあり、教育実習とはどのような雰囲気なのかなど実際の様子が分からないまま向かった実習は不安と緊張、そして様々な発見の連続でした。

実習の初めは生徒とのコミュニケーションがお互い緊張していたせいか、中々とることができませんでした。休み時間やＨＲ、給食の時などに趣味や部活について、昨日何をしたのか？などどんな些細なことでも自ら率先して積極的に話しかけていくことで、生徒との距離を縮めていくことができ、気がついた頃には生徒から話しかけてくれる様になりました。

教科指導では、どのようにしてクラスの生徒全員を授業に引きつけていけばよいのかがとても難しかったです。ただ、授業内容の説明を一方的に行うだけでは身に付かず、実験や観察など、学校の主役である生徒自身に実際にさせていくことで知識が定着し理解できるようになるのだと思いました。また、教師自身も常に教材研究を進め、生徒からのどんな質問にも答えてゆける様にしなければ、『理科』という科目の面白さ、素晴らしさを生徒たちに伝えていく事ができないと強く感じました。

教育実習を行い、学校は教科指導から始まり学級指導、生徒指導、委員会、部活動とたくさんの組織を『学校』と

いう大きな組織でまとめ運営しているということを実感しました。そして、授業だけでなく学校生活における全てが、教育・学びの場である事を常に感じる日々でした。何気ない生徒の一言から見える友人関係や家庭環境、クラス37名をまとめる大変さ。３週間という短い期間でしたが、様々な出来事が新しい発見・勉強で大学の授業では体験する事のできない貴重な、一生忘れることのない経験になりました。

これから実習を迎える皆さんも、実習中はとにかく忙しくなるかと思いますが、学校生活を通じて生徒の笑顔を見られた瞬間の喜びが何よりも嬉しく、勇気に変わると思います。そして、多くのことを学び経験し、一生の思い出となるはずです。是非、失敗を恐れずに頑張ってください！

（社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻　平成24年度教育実習）

「教育実習を行って」

（埼玉県　町立小学校）

私は母校の小学校で４週間の教育実習を行いました。実習には「失敗してもいいからいろいろな先生から多くのことを学んでくる」という目標のもと臨みました。実習校は規模の小さな学校だったということもあり、子どもたちも先生方も温かく受け入れてくださいました。

２週間目の真ん中くらいまではほとんど授業見学を行いました。他学年の先生の授業を見せていただき、その際には、「その先生はどんなことを心がけて授業をしているのか」を考えながら見学をしていました。個人個人を大切にする先生もいれば、全体の規律を大切にする先生もいて、面白いと感じていました。私は来年以降こんな先生に実際になれるのだろうかなどとも考え、初めて子ども目線ではなく教師目線で授業を見ることができました。

子どもたちは初日の休み時間からたくさん話し掛けてくれました。最初はなかなか近寄ってくれなかった子も給食の時間などに積極的に話す機会を作っていると、１週間くらいして子どもたちの方から近寄って来てくれるようになりました。とてもうれしく感じました。休み時間には「ドロケイ」をみんなでやりました。だんだんと他の学年の子も混ざってきて、最後は全校の半数くらいの子と一緒にドロケイをできたのはとても楽しく思い出に残っています。

授業は２週間目の金曜日から徐々に始まっていきました。最初の授業は国語の聞き取りの授業でした。先生からの話を子どもたちが聞いて内容を理解するというものでした。テーマは「家族」で、私は事前に短めのお話と設問を考えました。当日は学校公開日だったので、保護者の方も何人かいらしている中で行いました。少し緊張もしたけれどとにかく子どものことだけに集中しようと意識しました。子どもたちも気を使ってくれて率先して手をあげてくれました。それに助けてもらいながら授業を楽しく行うことができました。担任の先生との授業のふりかえりでは、声の調子は聞き取りやすかったこと、プリントには挿絵などを入れると子どもたちの注意をひくことが出来る、などの言葉をいただきました。

実習最終日は、その時点で私は翌週からボランティアとして引き続き小学校で入らせてもらうということが決まっていて、子どもたちもそれを知っていたので、「また来週ね！」と笑顔で別れることが出来ました。それでもクラスの子たちや他の学年の子たちがお手紙やクラブ活動で作った作品を渡しに来てくれたのはとてもうれしく思いました。現在は毎週水曜日にボランティアとして入っていますが、毎日見ていると、なかなか気が付かなかった成長に驚かされることも多くありとても充実しています。

４週間で学んだことは子どもたちに力をかければかけるだけ、子どもたちからの信頼度も変わってくるということです。私の実習担当の先生もそうでしたが、どうやって子どもたちを喜ばそうかとずっと考えていて、素敵だなと感じました。私も今後は子どもが幸せになるにはどうしたらよいかを考えつづけていきたいと思いました。

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成28年度教育実習）

3〔介護等体験〕

５日間の介護等体験は、普段の生活では学ぶことのできない貴重な体験をすることができ、充実した時間を過ごしました。

私が体験を行った施設は、障害のある方が働く作業所でした。普段の生活では、なかなか障害のある方と関わる機会がありません。はじめはどのように接したら良いのか不安でいっぱいでした。しかし実際に施設へ行ってみると、利用者の方々は明るく元気に私たちを迎え入れてくださいました。

初日はコミュニケーションをとるのに苦労をしましたが、徐々に慣れていき、相手の話にしっかりと耳を傾け、相手の気持ちになって考えることにより、今何がしたいのか、何を自分に言っているのかがわかるようになりました。そうすると、よりスムーズに一緒に作業をすることができるようになりました。５日間緊張もしましたし、大変なこともたくさんありました。しかし得たものも多く、体験を通して人とのかかわりをより大切にするようになったと思います。

介護等体験を終え、改めてたくさんの人と関わる教員という職業を考えることができました。この経験を活かし、教員を目指して頑張ろうと思います。

（家政学部被服学科　平成22年度〈社会福祉施設〉）

私は二年生のときにデイサービスセンターに５日間、三年生のときに特別支援学校に２日間、介護等体験に参加した。デイサービスセンターではお年寄りの方々が日帰りで１日お話しをしたり、入浴、体操などをして過ごしている。私は、そうして毎日いらっしゃる方々の話し相手をしたり、昼食の準備をしたり入浴後の髪をドライヤーで乾かしたり、一緒にゲームに参加したりした。また納涼祭の季節だったので盆踊りや、お祭りで配るしおりや飾りの作成などを一緒に手伝った。

特別支援学校では小学部と中学部が一緒の学校の小学部１年生のクラスに入った。特別支援学校は、通常の学校にはない自立の時間などがあり、着替えや一日のスケジュールを理解するなど、生活の仕方を学ぶ時間が多かった。また文化発表会の時期だったので練習とリハーサルにも参加した。児童によってさまざまな個性（障害）があり、走り回ってしまう子や一つのことをやりだすとなかなかやめられない子などいたが、教員の方々は一人ひとりに合わせた接し方をしていた。二日間という短い期間では授業内容を把握したり、技術的な部分を学ぶことはなかなかできなかったが、児童との交流はよく取れたと思う。

介護体験にいって思ったことは、デイサービスセンターでも特別支援学校でも、安全の確認を第一に行う中で一人ひとりに合わせた対応をしているということだ。またそのためには日常のコミュニケーションからその人がどんな支援が必要なのかと云うことを見極めることを重視していると感じた。そしてそれは専門の知識がなくてもできることだ。確かに排泄・入浴や昼食介護などは、専門の知識や資格が必要であるので私には何も出来ることがなかった。しかしコミュニケーションをとったり、危険かどうか注意して見ることはできるので、自分からもとにかくたくさん関わりを持つことを心がけた。

（文学部日本文学科　平成22年度介護等体験〈社会福祉施設〉
平成23年度介護等体験〈特別支援学校〉）

「介護等体験を通して学んだこと」

私は介護等体験として、２年生の時に福祉センターの中にある障がいのある方が仕事訓練をする施設に５日間行きました。３年生の時には、特別支援学校に２日間行きました。

①福祉センター

私は、就労継続支援Ｂ型の方が仕事する場所に配属になりました。就労継続支援Ｂ型という言葉をはじめて知りました。介護等体験の前に何も知らないままで体験を行うことは、失礼と考え、障がいについてのことや就労継続支援Ｂ型について様々なことを調べていきました。５日間の体験内容は、施設利用者の方と、福祉センターが請け負っている割り箸の袋詰めをしたり、センターが経営しているパン屋さんの掃除をすることでした。また、お昼休みには昼食を一緒に食べました。話をするときは、話をする、仕事をするときは仕事をするという、施設利用者の方にメリハリをつけるのが難しかったです。この活動を通して、プラスの声かけというのを考えながら関わることが大切であると学びました。

②特別支援学校

現場でしか、体験することができないことをたくさん経験することができました。普段の生活の中で障がいがある方と接する機会は、ほとんどありません。前日は大変緊張しましたが、当日は充実した日になりました。

特別支援学校とは、名前は知っていましたが、どのような学校なのかよくわかりませんでした。私は、体験前に必ず特別支援学校とはどういう学校なのか、どのような障がいがあるのかというのは、きちんと調べておいたほうがいいと思います。そして、当日、担任の先生にクラスの生徒がどのような障がいがあり、どのような接し方をすればいいのかアドバイスを聞き、先生と介護等体験生との、情報交換を綿密にすることをおすすめします。生徒は、介護等体験生であっても、先生という認識をしています。先生が、不安がっていると、生徒も不安がってしまいます。私が経験したことでいうと、１日のスケジュールがしっかりしていないと活動ができない生徒がいました。私が、１日のスケジュールを把握していなかったため、生徒が「次、何をしますか？」という質問に私がすぐ答えることができなく、不安にさせてしまったことがありました。あの時私ができたことは、おどおどするのではなく、黒板に１日のスケジュールが貼ってあるので、一緒に見に行こう！という声かけができればよかったと思いました。一つの言葉であっても、視点を変えて、プラスの言い方に変えていく力が大切であると思いました。

最後になりますが、必ず目標を立てて、介護等体験に挑むことが必要です。私は、①「発語がない方でも、諦めずにコミュニケーションを取る。」②「施設利用者の方や生徒が１人でできることは、最後まで手を出さずにやり抜くまで見守る。」③「どんな時でも笑顔で明るく！はきはきと！」というこの３つを目標に掲げて、２つの介護等体験を行いました。いろいろなことを頑張ろうとすると、自分が大変になります。五感を働かせて、たくさんのことを吸収してください。現場の辛さ、楽しさなど、様々なことを経験することができます。

文学部英文学科　平成27年度介護等体験〈社会福祉施設〉
平成28年度介護等体験〈特別支援学校〉

4〔教員採用試験〕

「教員採用試験で自分を磨く！」

（東京都・中学・家庭）

「中学校の先生になりたい！」

私には、教職を目指すきっかけとなった恩師がいます。その恩師には中学校時代に出会いました。なぜ印象に残っているかというと、常に生徒のことを真剣に考え、嬉しい時には一緒に喜び、時には厳しく生徒に向き合っていたからです。その姿を見て、将来は私も恩師のような教員になりたいと思いました。

時が経ち、大学に入学した頃の私は、高倍率で難関の教員採用試験を乗り越える自信がありませんでした。不安を抱えたまま日々課題に追われ、気づくと大学３年生の春を迎えました。

ある日、学内の掲示板に１枚の案内が貼ってありました。それは、区立小学校で放課後、児童にプリントの指導や添削をするサポーターを募集しているというものでした。私は、子どもたちと関わることができる良い機会だと思い、授業の空き時間を使って活動を始めました。この活動を通して、子どもたちは分からなかった問題が分かるようになった時に素敵な笑顔を見せることに気がつきました。そして、教師になって子どもたちの良いところを伸ばしていきたいと強く思い、教員採用試験の受験を決心しました。

教職教養と専門教養の対策は、学内で行われる「教員採用試験対策講座」に参加して学習すべき内容や学習方法を学びました。また、過去問を解く際には、問題を解くだけではなく、出題されている問題の基となる資料を見て学習を深めました。さらに、教員採用試験の模試を受験したり、受験する都道府県の教育委員会のホームページを見て、教育方針や教員課題、教育施策を確認したりしました。

論作文や面接対策としては、積極的に子どもと関わる機会を持つことで、教師を目指す動機や教師として子どもたちに何を伝えていきたいのかを深く考えました。また、教職課程の講義や教育実習で学んだこと、気づいたことを将来どのように活かしていくのか常に考えるように努めました。

今、振り返ってみると、教員採用試験を受験するまでの限られた時間は、「自分を磨く」時間だと思います。試験勉強だけでなく、日々の授業、サークル、ボランティア、趣味など大学生の時にしかできないことにどんどん挑戦し、自分の長所を伸ばしていってください。教師は子どもたちを笑顔にし、夢や希望を見つけて生きる楽しさを伝えることができる職業です。多くの人との出会いや経験を大切にして、困難も諦めずに乗り越えてください。皆さんの夢が叶うことを心から応援しています!!

（家政学部食物学科食物学専攻　平成22年３月卒業）

「未来の同僚の皆さんへ」

（新潟県・小学校全科）

「３月28日」忘れもしない、わたしが教員採用試験対策の勉強を始めた日である。春休み明けのガイダンスの日、「もう４年生か…」などと安易に考えていた私の目に飛び込んできたのは、参考書や問題集を眺めるクラスメート達の姿だった。そこから、私の教員採用試験対策が始まった。後輩の皆さんには、私のような失敗をしてほしくないので、僭越ながら、以下に２点のアドバイスをしたい。

１点目は、勉強をする覚悟をすることである。「教員採用試験は時の運」とよく言われるが、最低限の学力がなければ運を味方につけることさえできない。私はまず、自分が集中して勉強できる場所（私の場合は大学）を見つけ、そこにこもって１冊の問題集（セサミノート）をひたすら繰り返した。ただ、私の失敗は最後まで受験する県を決められなかったために、オールマイティに勉強するしかなかったことである。もっと早く受験する県を決めていたなら、

それだけ早くその県の傾向に合わせて勉強することができたと思う。実際に勉強して実感したことだが、その県によって絶対に出題される問題や全く出題されない問題などがはっきりしている。すべてを頭に入れる必要はなくピンポイントに勉強すれば、解くのは問題集の３分の１程度でよい。

２点目は、小論文や面接の指導をしてもらえる人を見つけることである。一人でコツコツ問題を解けばよい勉強とは違い、小論文や面接は適切な指導者がいなければ対策を立てることができない。私は、大学の先生や理科支援員としてお世話になっていた小学校の校長先生などに指導していただいた。指導していただいているうちに、小論文や面接に関しては得手不得手よりも練習量だと痛感した。論文の形式をつかむまでは書くよりほかにない。面接で語れるだけの教育経験を積むには、様々なボランティアをするなどして経験するしかない。大学生活で自分が語れる引き出しをたくさん作り、それをうまく引き出してくれる指導者に協力してもらうことが大切である。

このように考えると、自分が非常に大層なことを成し遂げたかのようだが、担任として子どもたちを預かる立場となった今振り返ると、試験対策だけで努力していると感じていた自分が恥ずかしい。それだけ、クラス担任は忙しく辛いことも多い。しかし、その辛さを遥かに凌ぐほどの喜びがあるからこそ、「学校の先生」はやめられない。

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成22年３月卒業）

「夢に向かって」

（東京都・小学校全科）

小学生のときからの夢。それは、"小学校の先生"になることであった。大学に入ったばかりの頃は、教育実習も教員採用試験もまだまだ先のことだと考えていた。実際に、自分自身が小学校現場に入ることや、教員採用試験を受けることのイメージすらもてなかった。しかし、大学生活はあっという間に過ぎるもので教員採用試験の勉強をする時期にきてしまった。はじめは、何から勉強して良いかわからず、先輩にどんな本を使ってどのような方法で勉強したのかを聞きそれを参考に始めた。いざ始めると、あまりの出来なさに「本当に受かるのだろうか。」という不安で一杯になった。また、同時進行で卒業論文もあったので両立してやることが難しく、どちらかに偏ることもあった。問題集には、あらゆる分野のことが載っており、一つ一つ解いていくのがとても大変だった。そんなときに、大学の先生が「過去問を解くと良い。」というお話をしてくださった。過去問なら、一回に解く量が限られているし実際に過去に出た問題となるとやる気も湧き出てきた。しかし、解いてみるとやはり合っている数よりも間違っている数の方が多かった。間違えたところは、すぐにやり直し同じような問題を問題集から探して繰り返し解いた。何回か過去問を解いていくうちに、同じような問題が出ていることや自分が苦手な分野に気付くことができた。それからは、大学で友達と一緒に励まし合いながら勉強をした。互いに辛いときもあったが、一人じゃないと思えたので頑張ることができた。また、一次試験には小論文があり私の大の苦手であった。自分の中で小論文の対策法を考えないと合格しないという思いがあったので、とにかく量をたくさん書こうと思った。また、大妻中野高等学校の校長先生が小論文の対策法を講義でやってくださり、約１ヵ月に一回のペースで添削をしてくださった。毎回ご指導をしてくださることで、次への課題に活かすことができた。

二次試験の面接は、集団面接と個人面接であった。面接の練習は、一人ではできないので先生に練習をしていただいたり、友達何人かでテーマを決めて討論したりした。採用試験当日はとても緊張したが、笑顔と明るさだけは忘れずにおこなった。そして、面接官の目を見ながら聞かれたことに対してハキハキと答えることを意識した。また、面接は日頃の自分の思いや考えが表れるので、「自分はどんな教師になりたいのか。」「子どもたちとどのように関わっていきたいのか。」ということを考えておくことが必要である。そして、学校の中では様々な場面に出くわす。そんなときも、慌てずに対応できる柔軟性を身に着け、アピールできることが大切だと思った。

教員採用試験を受ける前は、本当に受かるかどうか不安な気持ちで一杯だったが今私は、東京都の教員として毎日子どもたちと過ごしている。大変なこともあるが、それ以上に楽しいこともありこの仕事について良かったと実感す

る日々である。

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成21年３月卒業）

教員採用試験を終えて

（群馬県・中学・理科）

私は、群馬県教員採用試験を受けました。そして合格することができました。学生の私にとって、採用試験に合格することが試験勉強を行う上での目標でした。しかし、合格した今の私は目標を達成することが出来たと同時にここからがスタートであると感じています。

私は高校生の時から教師になりたいと考えていましたが、いざ就職にむけて進路を決め始める頃は、自分が本当に教師になれるのかと不安を感じ、決心するまで心のどこかで迷っている部分がありました。しかし、理科実践演習の講義などを通して理科の教材を作る楽しさや、普段の生活の中でも授業に使えるような写真は撮れないか、話題はないかなど探すようになり、先生になって沢山の生徒に理科の楽しさを教えたいと強く感じるようになりました。

教育実習では実際に生徒と関わり合い、生徒との接し方や授業を行う上での工夫などを学びました。生徒と関わっている時間はとても楽しく毎日が充実していました。３週間を終えたときには絶対教員になると思いが強まりました。

試験勉強はとても長い期間でしたが、最後まで気持ちを切らさずやってこれたのは、教師になりたいという強い気持ちと、それに加えて私が一人ではなかったからです。多摩キャンパスの理科教職のメンバー、千代田キャンパスの同じ教員を目指す仲間がいたから私は最後まで勉強を続けることができました。受験は団体戦だとよく言いますが、この意味を初めて理解することができた気がしました。先生方には様々なことを指導していただきとても感謝しています。

私の今の目標は、残りの学生生活を充実させるとともに４月から教壇に立つ立場としてしっかりと勉強して、準備をしておくということです。今からが私のスタートです。

（社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻　平成29年３月卒業）